

武蔵野幕屋創立53周年記念 祈祷会

求めよ

——マタイ伝第7章7～11節——

1993年9月26日

小池辰雄

我を求めよ お前自身が天国体になるぞ 終りなき旅路 生活即伝道 祈り

【マタイ7】

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与えんや。11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。

●我を求めよ

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。

このキリストの、「求めよ」は無条件に書いてありますが、

「我（キリスト）を求めよ」

ということですよ。私たちは、キリストの他に求めるものはない。キリストを抜きにして何を求めても、これはダメ。キリストだけを求める。キリストは無条件に自分を与えてくださる。

「我を求めよ。さらば、我を汝に与える。

我を尋ねよ。さらば、見いだし。

我という門を叩け。さらば、開かれる」

私はそういうように読まざるを得ない。キリストを求めて、求めそこないはない。ということよ、我々が求めるより先にキリストは与えようとしておられる。キリストは最高のもの、最高の求めです。キリストの他に何も要らん。そうしたらエライことになる。

「すべて、私を求める者は必ず得る。

私を尋ねる者は必ず見いだし。



「私という門を叩く者は必ず開かれる」

という、無条件の世界です。本当のものはすべて無条件です。こちらの条件が要るようなものは本ものではない。

「学問がある」

とか、

「どれだけ善行がある」

とか、何とかかんとかは一切要らない。

「キリストを求める」

ということとは結局、

「自分をキリストの中に投げ入れる」

ことです。この無条件の世界というものは一番素晴らしい。自分がその中に入れられますから、そうしたらもう、居ても立つてもらえられない。そういう素晴らしい世界です。

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与え

んや。11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。

まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。

「善き物」と一番先に出ている。

「キリスト自身、聖霊そのもの」

それが「善き物」です。ルカ伝11章13節をこらんになるとわかる。「善き物」とは聖霊のことです。

キリストが入ってくると、或いは、キリストの中に自分が入ると、それはあまりに凄いから、今度は逆に人に与えざるを得ない。

「キリストのところに来なさい」

と、人を呼ぶ。

「来たりて見よ」

というわけです。そのキリストは、

「十字架のキリスト、復活のキリスト、聖霊のキリスト」

です。

「十字架・復活・聖霊」

は離すことができません。十字架が土台です。霊的に甦った、霊的に神現したところのキリスト。その実体が聖霊です。この三つは離すことができない。それを瞑想して入ると、もうそれだけで、無言のもの凄い祈りの世界に入ってしまう。

●お前自身が天国体になるぞ

「祈り」とは何かこちらから、「お願い」することではない。



「キリストを祈り求める」
ことです。

「汝ら、神の国と神の義を求めよ」(マタイ6・33)
とある。あの「義」というのはキリストという義です。

「そうしたら、すべてのものが自ずからやってくる」
と。その人になくなくてはならないものがやって来るわけです。

何も人と比較研究する必要はない。その人その人にのつべきならぬものが来る。人間の存在というものは一人びとりのつべきならぬようにできている。それを神・キリストは知りたもう。

「あれはこうした、あれはこういうものをもらった」

なんて、そんなことを比較しているうちは、いつまでたってもダメです。一人びとりに、その人に絶対的なものがやって来る。その人の業は、キリストを求めると、神の栄光が現れるような不思議なことが起きてくる。我々のすることはすべて、そういつたキリストにあつて神の栄光が自然に現れる。だからもう、讚美するよりかしようがない。

この「求める」ということは、

「自分で何かを自分の中に入れよう」

なんて、そんなことではない。

「キリストを求めよ、そうしたら、お前自身が天国体になるぞ。人にそれを分かつた

ざるを得なくなるぞで

ということですよ。

「求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開

かれん」

と、無条件でキリストが言つてらつしやるのは、

「私をだよ」

ということ。言葉の背後の、キリストの魂を、心を、靈言を、それを聴かなければダメなんです。

解釈とか意味づけとか、そんなことではない。何しろ、そういうことでない、私の魂はどうにもならん、いわゆる「意味づけ」なんてものでは。「聖書註解」なんて、そんなものはひとつも要らん。註解書なんか要らん。昔はたくさん参考書なんか読んだけれども、今考えると馬鹿らしい。ところが、みな「聖書研究会」なんてことばかりやっている。それではくたびれてしまう。デイスカッションしている。ダメだよ、そんなことで福音の世界に入れるものか。

一人びとりが生命懸けでキリストを求めれば、一切のものが成っていく。キリストは無条件に与えられる。こんなありがたいことはない。



「主よ、まほしきよー」

と言つて祈れば——祈ると同時に自分をキリストの中へ投げ入れるんです、こつちに坐つてゐるのではない——そうしたら、キリストと一つにされるから、もうそこで、あとは祈ることがなくなつてしまふ。

「ありがとうございます」
と、それだけ。

「主さま。……ありがとうございます。アーメン、ハレルヤ！」

これが一番いい祈りなんだ。もう実に簡単です。それは、力が来てしようがないですよ、上から力がきて、生命がきて。

● 終りなき旅路

私は終りを知らない人間です。私の人生には終りはない。

「先生はどうとう死んだ」

なんて、そんなことは言わないでくれ。

「あつち側に往きました」

と言う。死なないんだ、終りなき旅路です。

よく、「全き」^{まったく}なんてことを言う。全きはダメだよ。全きものというものはそれでお終いということですよ。お終いではダメなんだ。限りない世界、終りなき世界だから。私は終りなき人間なんです。

「永遠の生命」

とはそういうことなんだ。烈々たる魂にされるんだね。そこらの火よりもつと凄い火なんだ。へこたれることがない。いろいろなことにでつくわせば、逆に力がくる。だから、ありがたくてしようがない。

アッシジのフランチェスコが何でも感謝して、神を讚美したという。全くその通りです。私は今度はフランチェスコを読んで本当に楽しかったね。ルターとかカルビンとか、そんなのではない。フランチェスコの方が本ものなんだ。大変なひとだ、本当のどん底の人なんだ。どん底に平伏すと、そこが天国になる。こんなありがたいことはない。

およそいわゆる道徳の世界の自己修養とか自己完成とか、そんなことではない。そんなものはみな行き詰まつてしまふ。道徳・哲学の世界は全部、限界があつてダメです。悪いとは言いません。始めは、そういうことを大いにやってみてください。しかしながら限界がわかる、

「なるほど、これではダメだ」

と。ところが、学校ではそこまでしかやらない。

日本の民主主義なんていうのもそうだ。エイブラハム・リンカーンはゲチスバーグの戦



いの後で、

「神の下において、人民の人民による人民のための政治」

と言った。

「アンダー ゴッド」(神の下において)

と言っている。日本の民主主義にはあの「アンダー ゴッド」がない。神抜きの民主主義なんてものはダメなんだ。それでみな

「民主主義、民主主義」

と言っている。ダメだよ、日本人は本当に。まだ、西郷南洲が

「敬天愛人」

と言っている、あの「敬天」があつた方がよっぽどいい。

●生活即伝道

あなた方は本当に戦つてくださいよ、今の普通の日本ではダメだから。

「そんなところに生命があるか、光があるか」

と、学生にでも何でもいいから、はつきりものを言った方がいい。

「この人は」

という人をつかまえたなら、大いにそれに全身で語つてやったらいい。棄身で全身で語るものは必ず響く。遠慮は要らん。

ところが、このキリストだけは求めないんだね、他のいろいろなものは求めるけれども。

一番大事なものを求めない。キリストはここではつきりと、

「我われを求めよ」

と仰つてくださればよかつたんだけど。「我(キリスト)」は隠された文字なんだ。

「我によらずば神のもとに行くことができない」

とはつきり言っている。キリストは神への道であり、神からの道である。

いわゆる悟りの世界ではない。烈々たる生命のくる世界です。大変なひとだよ、キリストというひとは。だからもう、主さまだけでいい。どんな時でも、

「主さまー」

と、全身で腹の底から叫んでごらん、直ちに凄い世界に入るから。それが本当の祈りです。絶対に行き詰まらない。行き詰まるどころの騒ぎではない。だから、私はありがたくて楽しんでしようがない。何も力りきむ必要はない。とぼけづらで結構なんです。

皆さんはいろいろな仕事をもつていらっしやるが、どの仕事をなさるのでも、この境地でやったら、みな、そこにももの凄い光が、本ものが展開していきますから。みな神の栄光の現れです。悩める者、病める者、苦しめる者、悲しむ者をみな救つてしまふ。その人に接していれば、



「そうか、そんな素晴らしい世界があるのか」と、そういうことになる。

「キリスト教」ではないんだ。教訓おしえではない。

「キリスト教」

なんていう言い方をするから、

「キリストの教えはどういう教えか？」

なんて思う。教えではない。キリストそのものだ。「教」の字はいらぬ。いわんや

「キリストの思想」

なんていう本がある。冗談じゃない。哲学者とは違うんだ。

皆さんは、私の気合と同じになって共感して聞いていらっしやるから、私は話していても楽しい。あなた方も、どうぞ、

「二、三人わが名にありて集まる所に我も居る」(マタイ18・20)

という、そういう集会を自由自在にやってください。生活即伝道です。一、対一でも構わない。

二、三人でなくても一向構わない。

電車に乗って、隣の人にお菓子をやりながら、しゃべったっていい。先ずお菓子をやらなければ聞いてくれないからね(笑)。私はそれ式なことをやる。

「ま、これを食べてください…」

と。もったいないですよ、この福音をただ自分で持つていただけでは。腐ってしまう。

そして、本もの一人を段々つくつていく。神さまはつくつてくださる。「本もの」が大事なんです。いい加減なクリスチャンが百人いるよりも、本ものが一人二人いた方がよっぽどいい。そういう本ものをあなた方一人ひとりを通して、神さまに、キリストにつくつていただく。

困ったものだよ、キリスト教界なんて言ったって。

賀川豊彦は本ものです。あの人こそはどん底を歩いて、そして人を救った人だ。自分がトラホームにまでなつてしまつて、病氣までしよつて、荒屋あばらやに住んで……。彼のことは『エン・クリスト』51号(1992年7月夏季号「賀川豊彦 福音の身証者」)に心をこめて私は書きました(『霊界の星々』「賀川豊彦—愛の使徒—」)。

とにかく、どういう形であろうと、我々一人びとりが道を伝える者、伝道者です。いいですか、伝道者という、もつとも言葉の深い意味における自覚をもつてくださいよ、男でも女でも老いたるも若きも。

● 祈り

祈ります。

私たちの罪のために十字架にかかり、私たちの贖いのために復活し、聖霊をくださった



主さま。言葉がありません。御前に平伏します。ここに集まった兄弟姉妹たちは、今日はそれぞれあなたの前に平伏し、砕かれ、あなたの砕けをいただき、そして、本当にイザヤ書53章の預言の如くに主イエス・キリストさまをお迎えし、無条件にあなたが一人びとりに入ってください、ありがとうございます。私たちはこの無条件のご恩寵の中にいよいよ恐れなく入れられ、そして、み名を讃えつつ、み力にあずかりつつ、み光を受けつつ浴びながら進んで参ります。

どうぞ、兄弟姉妹たちをそのような本ものとしていよいよお育てくださらんことを切に願います。一人びとりが本当に天国の証者として進んで行くことが人生の目的であり、栄光であることをいよいよ体験していくことができますように。一人びとりが毎日、平伏しながら、本当に砕けながら、砕けをいただきながら、進んで行きます。かくして、あなたの驚くべきみ力にあずかって行きます。そのような体験を、また体現をいよいよ本ものとしてくださるように。また、そのことが成ることを信じて、み名を讃えつつ進んで参ります。

創立53周年の記念会をこのようにして、あなたが、み言葉、み霊ご自身をもって私たちに働きかけてくださり、ありがとうございます。私たちは本当に何ものとも代えることのできない主キリストさまをいただき、いよいよ進んで参ります。兄弟姉妹たちのすべての業をその角度から祝福してください。この兄弟姉妹たちを通して、あなたのみ国が一人、二人、三人と、伝えられていくことができますことを信じて、み名を讃え奉ります。本当にすべてあなたがみ業を為したもうから、全身をあなたの中に投げかけて進んで行きます。ありがとうございます。

今、尽くしませんが、心からの感謝と讃美を兄弟姉妹たちのそれとともに聖名にあつて捧げ奉る。アーメン！

